

びわこ成蹊スポーツ大学における授業評価アンケート結果の報告 —2005年度後期・2006年度前期の場合—

宮本友弘¹⁾ 山口 満¹⁾

A Report on Student Course Evaluation Questionnaires at Biwako Seikei Sport College in the Second Semester of 2005 and the First Semester of 2006

Tomohiro MIYAMOTO Mitsuru YAMAGUCHI

Abstract

At Biwako Seikei Sport College, student course evaluation questionnaires were carried out in 103 lectures and 44 physical exercise classes in the second semester of 2005 and the first semester of 2006. The data had been obtained from a total of 6,718 students for lectures and 1,287 for physical exercise classes. The purpose of this paper is to describe the overall results and clarify the point of view toward improvement of teaching and learning in lectures and physical exercise classes respectively. From the results of lectures, it was suggested that (1) 11 items in the questionnaire could be summarized into three subscales that were “teacher’s effort”, “understanding of lecture contents”, and “learning motivation”, (2) there were some improvements in aspects concerning “understanding of lecture contents” and “learning motivation”, (3) rating of “satisfaction” was influenced significantly by ratings of each of the three subscales, (4) when class-size was more than 121 students, rating of “satisfaction” fell drastically, and (5) comparing subject area, lectures in basic courses for major (in faculty) and major courses were rated higher than in general courses, basic courses for major (in department), and courses for teaching qualification. On the other hand, more than 80% of students positively rated all items in the questionnaire for physical exercise classes. Most students seemed to be satisfied with lessons by skilled teachers. Based on these findings, some perspectives of improvement in teaching and learning and curriculum were discussed.

Key words : Student Course Evaluation, Lectures, Physical Exercise Classes, Improvement of Teaching and Learning

1) 生涯スポーツ学科

1. 目的

びわこ成蹊スポーツ大学では、開学した2003年度より、授業改善に資することを目的に、学生による授業評価に取り組んできた。

実施にあたっては、学長、学部長の主導のもと、教員による全学的なワーキンググループ¹⁾が組織され、担当事務局との連携のもと、評価票の作成、調査の実施、データ処理、結果のフィードバックなど、授業評価に関わる一連のプロセスを担っている。毎年、人員的、予算的な措置を含め、その整備・拡充が進められてきた。

2003年度、2004年度の授業評価アンケートは試験的に実施され、評価項目、実施方法、結果のフィードバック等について、試行錯誤を重ねた（詳しくは、「びわこ成蹊スポーツ大学自己点検・自己評価報告書2003－2004年度」, pp41－42を参照）。調査票の整備に伴い、授業評価の本格的な導入に向けて、2005年度前期は、専任教員が担当する授業のうち最低1科目を対象に実施した。

以上を背景に、2005年度後期からは授業評価の本格的な導入が開始された。専任教員が担当する全ての授業において授業評価アンケートが実施され、そのまま、2006年度前期も継続された。なお、個々の授業の評価結果については、担当教員に個別にフィードバックされている。

そこで、本稿では、2005年度後期・2006年度前期に実施された授業評価アンケートについて、講義科目、実技科目それぞれの全体的

な結果を要約し、授業全般の特徴、及び、改善点を探ってみたい。

2. 方法

(1) 調査対象

授業評価アンケートの対象とした科目は、専任教員が担当する全ての講義科目と実技科目である。ただし、2005年度後期ではコース専門科目の演習・実習科目を講義科目に含めて実施したが、授業の性質、及び、回答結果の著しい偏りから評価項目が適切でないと判断され、2006年度前期では実施対象から除外した。

最終的に実施協力を得られた科目数（同一教員が同一科目を別時限に担当している場合は別科目とみなす）は、講義科目103科目、実技科目44科目であり、また、履修者数は講義科目8613名、実技科目1555名であった（表1）。

(2) 調査票

調査票は、講義科目用と実技科目用²⁾の2種類作成した。ともに教示文、評価項目、自由記述からなる。なお、回答の記入は別紙のマークシートに行うようにした。回答は無記名とし、フェイスシート項目として所属学科と学年を記入させた。

教示文では、アンケートの目的（授業改善のための資料を得ること）、プライバシーの保護（成績評価には一切関係ないこと、個人名が特定されないこと）、マークシートへの記入方法を明示した。

表1 授業評価アンケートの実施状況

		科目数	履修者数	有効回答数	有効回答率 (%)
講義科目	2005年後期	59	4792	3595	75.0
	2006年前期	44	3821	3123	81.7
	計	103	8613	6718	78.0
実技科目	2005年後期	17	606	521	86.0
	2006年前期	27	949	766	80.7
	計	44	1555	1287	82.8

表2 評価項目

講義科目用	
Q 1	あなたは、この授業の内容を理解できましたか
Q 2	あなたは、この授業の内容に興味がもてましたか
Q 3	あなたは、この授業を妨げるような行為（私語、携帯電話の使用など）はつつしむよう心がけましたか
Q 4	あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか
Q 5	教員の説明はわかりやすかったですか
Q 6	あなたにとって、この授業の課題や内容のレベルは適切でしたか
Q 7	板書、書画カメラ、ビデオ、パワーポイントなど、プレゼンテーションの仕方は適切でしたか
Q 8	テキストや配布物など、教材は授業内容の理解に役立ちましたか
Q 9	教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか
Q10	あなたは、この授業に関する自学自習をどの程度しましたか
Q11	あなたは、この授業で学んだことをもっと深めたいと思いますか
Q12	あなたは、この授業に満足していますか
実技科目用	
Q 1	あなたは、この授業で、運動に関する理解が深まりましたか
Q 2	あなたは、この授業で、運動技能が向上しましたか
Q 3	あなたは、この授業で、グループの仲間と楽しく活動できましたか
Q 4	あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか
Q 5	教員の説明はわかりやすかったですか
Q 6	あなたにとって、この授業の課題や内容のレベルは適切でしたか
Q 7	この授業で行われた施設や使用した用具に満足できましたか
Q 8	あなたが授業に取り組む上で、板書の内容や資料は役立ちましたか
Q 9	教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか
Q10	あなたは、これまでの授業中で、先生から助言を受けたり褒められたりしたことがありますか
Q11	この授業は、安全に配慮された授業だと感じましたか
Q12	みんなが授業を楽しむことができるように工夫されていたと思いますか
Q13	運動をしている時間が十分にあったと思いますか
Q14	あなたは、この授業に満足していますか

評価項目は、他大学の事例や関連文献（橘，2005など）を参考にして作成し、講義科目用は12項目、実技科目用は14項目からなった（表2）。このうち、「あなたは、この授業に満足していますか」（以下、「満足度」。講義科目用Q12、実技科目用Q14）は、授業の総合的な評価項目として位置づけた。回答はいずれも4段階評定とし、項目の内容に応じて選択肢が「肯定」、「やや肯定」、「やや否定」、「否定」になるように文を付した（例、「よく理解できた」、「だいたい理解できた」、「あまり理解できなかった」、「理解できなかった」）。

自由記述項目は、講義・実技ともに、マークシートの裏面を利用して、授業についての

感想や意見、改善点を自由に記述させた。

（3）調査時期と手続き

2005年度後期は定期試験前3週間以内、2006年度前期は定期試験前2週間以内に各授業時間を利用して実施することとした。その間における実施日時の決定は各授業担当教員に一任し、次の手順で実施してもらった。①実施日の授業直前に教務課で調査票一式（実施手順も含む）の入った封筒を受領する、②適宜、授業時間内に10分程度の時間を割り、教示の後、調査票と回答用マークシートを配布して学生に記入させる、③終了後、評価票と回答用マークシートを回収し封筒に入れ厳

封し，教務課に提出する。

3. 調査結果

回答に不備がみられた者を除外した結果，有効回答数は講義科目6718名，実技科目1287名で，履修者数に対する割合（有効回答率）は講義科目78.0%，実技科目82.8%であった（表1）。以下，講義科目・実技科目ごとに評価項目の分析結果について述べる。分析にあたり，評価項目の選択肢は，「肯定」を4点，「やや肯定」を3点，「やや否定」を2点，「否定」を1点として数値化した。なお，自由記述については一括した処理は行わず，評価結果を各教員にフィードバックする際，回答済みのマークシートもそのまま渡し，各自で検討してもらうこととした。

（1）講義科目の結果

1）評価項目の因子構造

「満足度」（Q12）以外の11項目を分類する

ために因子分析（重み付けのない最小二乗法）を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子を抽出し，プロマックス回転を行った。回転後の因子パターンと因子間相関を表3に示す。

第1因子は，「Q9 教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか」，「Q8 テキストや配布物など，教材は授業内容の理解に役立ちましたか」，「Q7 板書，書画カメラ，ビデオ，パワーポイントなど，プレゼンテーションの仕方は適切でしたか」の3項目に対する負荷量が高く，教材や指導法の工夫を含め，授業運営に対する教員の努力を示唆する内容になっている。そこで「教員の努力」因子とした。

第2因子は，「Q1 あなたは，この授業の内容を理解できましたか」，「Q6 あなたにとって，この授業の課題や内容のレベルは適切でしたか」，「Q5 教員の説明はわかりやすかったですか」の3項目に対する負荷量が高く，

表3 講義科目における評価項目の平均値，標準偏差，及び，因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）（N=6718）

項 目	平均値	標準 偏差	因子パターン		
			I	II	III
Q 9 教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか	3.36	.72	.71	-.13	.08
Q 8 テキストや配布物など、教材は授業内容の理解に役立ちましたか	3.11	.75	.61	.13	.01
Q 7 板書、書画カメラ、ビデオ、パワーポイントなど、プレゼンテーションの仕方は適切でしたか	3.02	.80	.54	.23	-.06
Q 1 あなたは、この授業の内容を理解できましたか	3.01	.72	-.03	.78	.05
Q 6 あなたにとって、この授業の課題や内容のレベルは適切でしたか	2.96	.71	.06	.67	.00
Q 5 教員の説明はわかりやすかったですか	2.96	.82	.38	.49	-.02
Q 4 あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか	3.03	.75	-.02	.17	.67
Q 3 あなたは、この授業を妨げるような行為（私語、携帯電話の使用など）はつつしむよう心がけましたか	3.28	.70	.25	-.21	.51
Q11 あなたは、この授業で学んだことをもっと深めたいと思いますか	3.10	.78	.16	.20	.46
Q10 あなたは、この授業に関する自学自習をどの程度しましたか	2.51	.90	-.18	.30	.45
Q 2 あなたは、この授業の内容に興味がもてましたか	3.17	.76	.21	.30	.36
因子間相関			I	II	III
			I	-	.75
			II	-	.76
			III		-

表4 「満足度」と下位尺度得点の相関 (N=6718)

	満足度	教員の努力	授業内容の理解	学生の学習意欲
満足度	—	.66***	.72***	.70***
教員の努力		—	.67***	.64***
授業内容の理解			—	.72***
学生の学習意欲				—

***p<.001

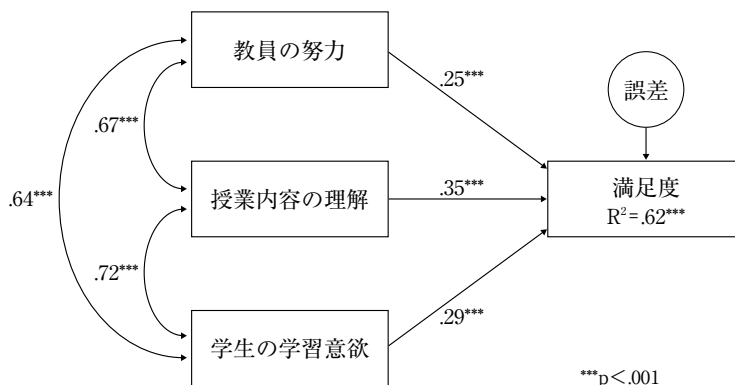


図1 「満足度」を目的変数にした重回帰分析の結果

授業内容の理解に関する内容になっている。そこで「授業内容の理解」因子とした。

第3因子は、「Q4あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか」、「Q3あなたは、この授業を妨げるような行為（私語、携帯電話の使用など）はつつしむよう心がけましたか」、「Q11あなたは、この授業で学んだことをもっと深めたいと思いますか」、「Q10あなたは、この授業に関する自学自習をどの程度しましたか」、「Q2あなたは、この授業の内容に興味をもてましたか」の5項目に対する負荷量が高く、学生の学習意欲を示唆する内容となっている。そこで「学生の学習意欲」因子とした。

以上の結果から、11項目を3つの下位尺度にまとめた。各尺度の内的整合性（ α 係数）は、「教員の努力」（3項目）が.73,「授業内容の理解」（3項目）が.80,「学生の学習意欲」（5項目）が.80であった。

2) 評定値の全体的な特徴

下位尺度ごとに項目を整理して各項目の平均値をみると（表3）,「教員の努力」では3

項目の平均値がともに肯定的な評定値である3を越えている。とくに,「Q9教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか」の平均値3.36は11項目の中でもっとも高い。このことから、学生は「教員の努力」に関する内容全般を高く評価している。

「授業内容の理解」では「Q1あなたは、この授業の内容を理解できましたか」の平均値は3を超えていたが、他の2項目の平均値は3をやや下回っている。このことから、学生は、授業の内容を理解できるとしつつも、授業の課題や内容のレベルをやや不適切、教員の説明がややわかりにくいと感じていることが示唆される。

「学生の学習意欲」では「Q11あなたは、この授業に関する自主学習をどの程度しましたか」以外の他の4項目の平均値は3を超えている。Q11の平均値2.51は11項目の中でもっとも低い。このことから、学生は、意欲的かつ真面目に授業に参加し、学習内容に対しても興味・関心は高いものの、授業時間以外での自主的な学習は伴っていない状況がう

かがある。

3) 授業の総合的評価

「満足度」(Q12)の平均値は3.03(標準偏差.78)であり、学生は講義科目におおむね満足しているようである。

「満足度」と3つの下位尺度の関連を探るために、各下位尺度に含まれる項目の合計値を下位尺度得点とし、「満足度」の評定値との相関係数(ピアソンの積率相関係数)を求めた。その結果、いずれも有意な正の相関が認められ、また、比較的強いものであった(表4)。さらに、「満足度」の評定値を目的変数、3つの下位尺度得点を予測変数にして重回帰分析を行ったところ、3つの下位尺度得点からのパス係数(標準回帰係数)はいずれも有意であった(図1)。このことから、授業の「満足度」に対しては「教員の努力」、「授業内容の理解」、「学生の学習意欲」の評価がいずれも寄与しており、「満足度」は3つの下位尺度の評価を総合的に反映した指標といえる。また、3つの下位尺度の中では、「授業内容の理解」が「満足度」にもっとも強く影響を与えている。

4) 履修人数による比較

教室の収容人数を基準にして履修人数の分類カテゴリーを設定し、講義科目を「30人以

下」(21科目)、「31人～54人」(29科目)、「55人～120人」(26科目)、「121人以上」(27科目)の4群に分けた。図2は、各科目の「満足度」(Q12)の平均値を求め、履修人数群ごとの分布を箱ヒゲ図で示したものである。箱ヒゲ図の「箱」は、第1四分位数(25%)から第3四分位数(75%)、箱内の線は中央値、「+」は平均値、箱外の「ヒゲ」は最小値、最大値を表し、それぞれの数値を付してある。なお、こうした箱ヒゲ図による結果表示は、大塚ら(2006)においても採用されている。

図2をみると、「121人以上」が他の3群に比べて全体的に低い位置に分布している。「30人以下」、「31人～54人」、「55人～120人」を比較すると、「31人～54人」の中心的位置がもっとも高く、「30人以下」の散らばりがもっとも小さい。以上のことから、いわゆる少人数ということだけで授業の満足度が高くなることはないが、少なくとも「121人以上」の授業になると総じて満足度は低くなる傾向にあることが示唆される。

5) カリキュラム上の科目区分による比較

カリキュラム上の科目区分に基づき、講義科目を教養科目(以下、「教養」。18科目)、学部共通専門科目(以下、「学部共通」。22科目)、学科共通科目³⁾(以下、「学科共通」。13

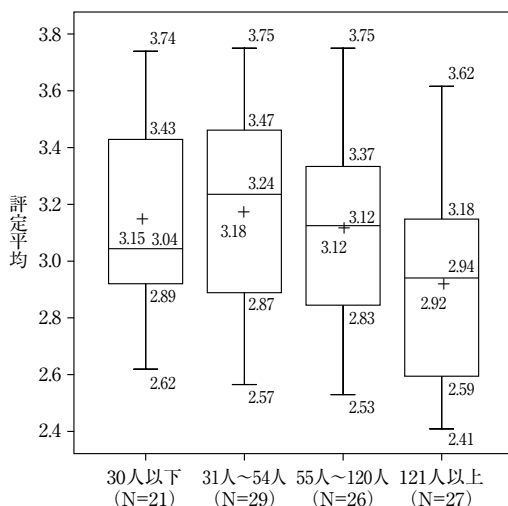


図2 「満足度」(Q12)の評定平均値の履修人数別分布(箱ヒゲ図)

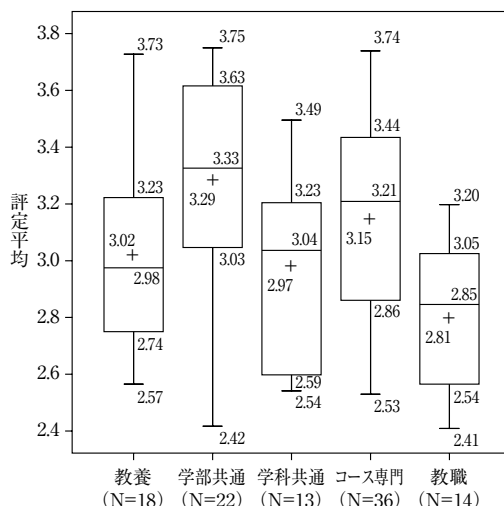


図3 「満足度」(Q12)の評定平均値の科目区分別分布(箱ヒゲ図)

科目), コース専門科目⁴⁾ (以下, 「コース専門」。36科目), 及び, 教職に関する科目 (以下, 「教職」。14科目) の5群に分け, 上記4)と同様に, 「満足度」(Q12)の平均値の分布について比較した(図3)。

図3をみると, 分布の中心的位置が大きく2つのグループに分かれており, 「学部共通」, 「コース専門」が高く, 「教養」, 「学科共通」, 「教職」が低い。中心的位置の高いグループでは, 「学部共通」の中心的位置が「コース専門」よりも高いものの, 散らばりも大きい。「学

部共通」では満足度の高い授業がある一方で, 低い授業も相当数あることがうかがえる。「コース専門」の授業は総じて満足度が高い傾向にある。

中心的位置が低いグループでは, 「教職」の中心的位置がもっとも低く, 散らばりももっとも小さい。「教職」の授業は総じて満足度が低い傾向にある。「教養」と「学科共通」の中心的位置はほぼ同等であるが, 「教養」では満足度の高い授業, 「学科共通」では満足度の低い授業が多くなっている。

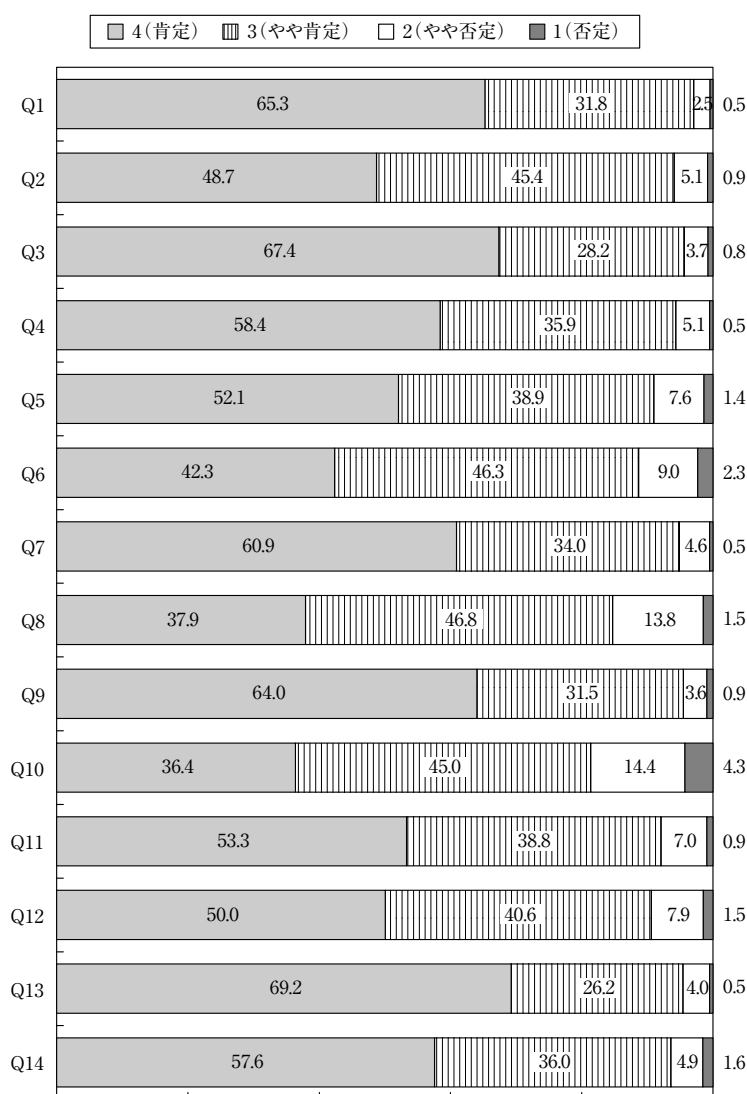


図4 実技科目における各項目の評定値の集計結果(%) (N=1287)

(2) 実技科目の結果

「満足度」(Q14)を含め、すべての項目において8割以上の学生が3以上を回答しており、また、Q2, Q6, Q8, Q10以外の項目では半数以上の学生が4と回答していた(図4)。このように評定値の分布に著しい偏りがみられたので、ここでは、間隔尺度データとしての処理は行わず、評定値の度数分布、及び、「満足度」との関連性から、個々の項目の特徴的な点のみを示すにとどめる。

図4をみると、「Q10あなたは、これまでの授業中で、先生から助言を受けたり褒められたりしたことがありますか」と「Q8あなたが授業に取り組む上で、板書の内容や資料は役立ちましたか」の2項目が、他の項目に比べて否定的な回答がやや多くなっている。

また、「満足度」と他の13項目との相関係数(スピアマンの順位相関係数)を求めた結果、いずれの項目も有意な正の相関であり、また、全体的に中程度の強さであった(表5)。とくに、「Q1あなたは、この授業で、運動に関する理解が深まりましたか」、「Q5教員の説明はわかりやすかったですか」、「Q6あなたにとって、この授業の課題や内容のレベルは適切でしたか」、「Q12みんなが授業を楽しむことができるように工夫されていたと思いますか」、「Q13運動をしている時間が十分にあったと思いますか」

むことができるように工夫されていたと思いますか」の4項目と「満足度」との相関が高い。

4. 考 察

本稿の目的は、2005年度後期・2006年度前期に実施された授業評価アンケートについて、講義科目、実技科目それぞれの全体的な結果を要約し、授業全般の特徴、及び、改善点を探ることであった。

講義科目については、まず、評価項目の因子分析の結果、「教員の努力」、「授業内容の理解」、「学生の学習意欲」の3因子を見出し、11項目が3つの下位尺度にまとめられた。因子の妥当性・信頼性にはさらなる検証が必要であるが、評価結果を整理・要約する上での観点となる。

3つの観点別に各項目の評定平均値をみた結果、「授業内容の理解」に関することとして、「授業の課題や内容のレベル」(Q6)、「教員の説明の仕方」(Q5)、また、「学生の学習意欲」に関することとして、「学生の自学自習」(Q10)にやや問題性があることが示唆された。これらは、講義科目全体の改善にとって留意すべき点といえる。

「満足度」には、3つの下位尺度すべてが影

表5 「満足度」と他の項目の順位相関 (N=1287)

項 目	満足度(Q14)
Q1あなたは、この授業で、運動に関する理解が深まりましたか	.51***
Q2あなたは、この授業で、運動技能が向上しましたか	.44***
Q3あなたは、この授業で、グループの仲間と楽しく活動できましたか	.36***
Q4あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか	.47***
Q5教員の説明はわかりやすかったですか	.50***
Q6あなたにとって、この授業の課題や内容のレベルは適切でしたか	.52***
Q7この授業で行われた施設や使用した用具に満足できましたか	.34***
Q8あなたが授業に取り組む上で、板書の内容や資料は役立ちましたか	.34***
Q9教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか	.49***
Q10あなたは、これまでの授業中で、先生から助言を受けたり褒められたりしたことがありますか	.42***
Q11この授業は、安全に配慮された授業だと感じましたか	.42***
Q12みんなが授業を楽しむことができるように工夫されていたと思いますか	.57***
Q13運動をしている時間が十分にあったと思いますか	.41***

***p<.001

響を与えており、下位尺度のそれぞれの評価が高まるほど、「満足度」は高まる傾向にある。3つの下位尺度のうちでは、「授業内容の理解」の影響がもっとも大きく、授業の課題や内容のレベルが適切で、教員の説明がわかりやすく、内容を理解できる授業に、学生は高い満足感を得ていると考えられる。服部(2004)においても同様の結果が報告されており、講義科目の改善にとって、「わかる」という側面を重視する必要がある。もちろん、他の2つの下位尺度も軽視し得ない影響力をもっており、むしろ、3つの下位尺度どうしに高い相関関係がみられることから、それらの因果関係を明らかにすることが課題である。

履修人数から講義科目を分類し、カテゴリー別に「満足度」の評定平均値の分布を比較した結果、履修人数が「121人以上」、すなわち、大講義室での授業において満足度が低くなる傾向がみられた。人数だけによる影響と単純に結論づけることはできないが、クラスサイズを見直す上で1つの目安になる。

同様に、カリキュラム上の科目区分で比較した結果、全般的な傾向として、「学部共通」、「コース専門」の満足度が高く、「教養」、「学科共通」、「教職」の満足度が低い。とりわけ「教職」の満足度は低く、また、「学部共通」のバラツキが大きい。こうした傾向は、カリキュラムの改善に際して注目すべき点である。ただし、本結果は授業の内容・方法をはじめ、履修人数、学年、学生の履修動機などさまざまな要因が影響していると考えられ、本結果のみをもって各科目群の良し悪しを断定することは避けなければならない。学部、学科、コース、共通教職といった組織単位において、詳細に検討することが望まれる。

実技科目については、いずれの評価項目においてもきわめて高い評価であった。専門性の高い教員によって、質の高い授業が実践されていることがうかがえる。ただし、ほとん

どの項目で天井効果を示しており、項目の評定段階数を細かくしたり、新たな項目を追加したりするなど、調査方法自体の改善が必要である。

個々の項目をみると、実技科目全般として「教員からの助言・賞賛」(Q10)や「板書内容や資料」(Q8)に一層の工夫が求められる。また、授業の満足度は、「運動に関する理解」(Q1)、「教員の説明」(Q5)、「授業の課題や内容のレベル」(Q6)、「授業を楽しむ工夫」(Q12)との関連性が高いことが示唆された。

以上、授業全般の特徴、及び、改善に向けて留意すべき点のいくつかが明らかになった。今後は、授業評価アンケート自体の改善はもとより、こうした全体的な結果を個々の授業改善、そして、カリキュラム改善にどのように結びつけいくかが課題である。

授業改善に向けては、大塚(2005)の提案する授業評価の「実践的妥当化」が示唆的である。彼によれば、それぞれの授業に固有の特徴・文脈によって、評価結果の意味が異なっているのは当然であり、評価結果を授業改善に生かす上で重要なことは、自らの実践の中で評価結果を意味づけていくプロセスであるとしている。このプロセスが「実践的妥当化」である。この観点に立てば、全体的な結果と担当授業の結果を比較し、そのズレの源泉をそれぞれの授業に固有の特徴・文脈において教員自らが吟味し、体得することが望まれる。さらには、授業評価が「制度的」なものとして終わらないためにも、教員の自発的な「実践的妥当化」を動機づけ、授業の改善を支援するようなFD(Faculty Development)研修が構想されるべきであろう。

一方、カリキュラム改善に向けては、全体的な結果から導き出される課題を、学部、学科、コース、共通教職といった組織単位で共有し、各組織単位の教育目標に照らして点検していくことが望まれる。そのためには、各組織単位での教員どうしの協力体制を築く必

要がある。

注

- 1) ワーキンググループの構成メンバーは次の通りである(順不同)。

2003年度 山口満(世話人), 宮本友弘, 黒澤毅

2004年度 山口満(世話人), 森昭三, 園山和夫, 豊田一成, 大久保衛, 須田泰明, 高橋正行, 宮本友弘, 佐藤馨

2005年度 山口満(世話人), 飯田稔, 吉田敏明, 松本格之祐, 宮本友弘

2006年度 山口満(世話人), 海老島均, 宮本友弘, 豊田則成, 松岡宏高, 小松崎敏

- 2) 実技科目用評価項目の作成は, 松本格之祐(生涯スポーツ学科教授)が行った。

- 3), 4) 学科共通科目は2学科のそれぞれで設定されているが, ここでは両学科の科目を込みにした。同様に, コース専門科目は6コースの科目を込みにした。

付記

2005年度後期の授業評価アンケートの実施にあたっては, 2005年度びわこ成蹊スポーツ大学共同研究費の補助を受けた。

引用文献

びわこ成蹊スポーツ大学(2006) びわこ成蹊スポーツ大学自己点検・評価報告書2003-2004年度。

服部環(2004) 授業評価項目の作成とその利用事例, 筑波フォーラム, 66: pp.33-37.

大塚雄作(2005) 学習コミュニティ形成に向けての授業評価の課題, 溝上慎一・藤田哲也(編), 心理学者, 大学教育への挑戦, ナカニシヤ出版: 京都, pp.2-37.

大塚雄作・松下佳代・湯浅太一・荒木光彦(2006) 京都大学工学部における授業アンケートへの取組とその特徴, 工学教育, 54(3): pp.142-148.

橘直隆(2005) 2002年度・2003年度学生による授業評価の報告, 大学体育研究, 27: pp.77-85.